
白馬から始まる人助け

katsubi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白馬から始まる人助け

【Nコード】

N4686P

【作者名】

k a t s u b i

【あらすじ】

四月、春真つ盛り。

高校二年の滝原と樫井は、授業中に校庭で走りまわる白馬を発見する。

自称“馬の言葉が分かる男”樫井曰く、なんとその白馬は異世界からやって来たという。

そしてそこから、人助けの物語が始まるのだった。

太陽が眠りにつき、月が昇り微笑み始めた頃。

全国のよい子たちがこぞって布団の中へと押し込められる時間に一つの物語が、語られ始めた。

むかしむかし、あるところに。

そんな優しい語り口で始まった物語。

布団の中で子供がわくわくしながら聴いていた物語。

愉快に起し、それを楽しく承けた物語。

そして開始から数分も経つと、物語は、絶望へと向かって転がり始めるのだった。

「」ところが、ある日突然、隣の国の王子が、攻めこんできたのです。

外が騒がしいと思ったアルパミ王は、お城の窓から外の様子を見てみました。すると、隣の王子様がたくさんの兵士を引き連れて、お城に向かってまっすぐ走ってくるのがすぐに分かりました。

お城の中は、大変だ、大変だ、と大騒ぎ。

アルパミ王は、これは大変である、と言って、すぐに相棒の白馬に乗って、逃げようと思いました。

でも、敵はもうすぐ近くに来ていて、逃げることは出来なかったのです。アルパミ王、大ピンチ」

「はいすいのじん、かなあ？」

「さあて、どうなるかな？」

「いいからママ、はなしをつづけて」

「はいはい。えっと……」『こんな時もあるつかと、と言って、アルパミ王はお城に戻り、ある場所へと向かいました。

入り組んだ廊下を進み、からくりで出来た壁の向こうにアルパミ

王は白馬に乗ったまま飛び込みます。そこは、隠し部屋だったので

す。これで一安心であるな、と一息つき、アルパミ王は敵がお城から帰っていくのを待ちました。

「ただ、どうしてだか、すぐに居場所がばれてしまいます。」

「お命頂戴！ と叫びながら、隣の国の王子様が入ってきました。」

「絶体絶命。アルパミ王は最後の手段を使おうと、大声でこう言いま

した。」「

「『なんていったの？』」「

「『これが吾輩の、切り札である！』』」「

「なあなあ、滝原」

四月、春真つ盛り。新学期特有のそわそわ感がまだ漂う中、後ろを向いて僕に話し掛けてきたのは、高一からの友人である榎井だった。

「なに？」

「授業中という事もあって、小声かつテキストに僕は返事をする。」

「……なんだなんだ？ 機嫌でも悪いのか？ あーそっか、この季節だもんな」

「英語のネイティヴ教師が、ちらりとこちらを見た。」

「じゃなくて、今は授業中。要件があるなら、早急に頼む」

「俺さ俺さ、実はさ、俺さ」

「ネイティヴ教師がこちらを見ている。決して“友好的な関係を築きたそうない目”ではなく、“授業中の会話を咎める目”で、だ。この教師、初回授業で“トンデモナイ行動”に出たから、僕は正直、怖かった。」

「馬の言葉が、理解できるんだ」

「はっ？」

素っ頓狂な声が、教室中に響く。この樫井、何を言っている。馬鹿か。真正銘の馬鹿か。授業中にどんな冗談だ。ネイティヴ教師がこちらを睨んでいる。「H m m . . .」とか唸りながらこちらを睨んでいる。やばい、怖い。

「Hee e e e e y , M r . T a k i h a r a ! ! A a a a a a n d , M r . K a s h i i ! !」

案の定、ネイティヴ教師の咆哮が教室に響き渡った。

そして、次の瞬間。「D E A D O R Q U I E T ! 選ビナサアーイ！ 静カニスルカ、死又カッ！」と叫びながら、ネイティヴ教師はやはり“トンデモナイ行動”に出た。

突然、片肩の肌を曝け出す。教室中の視線が、一斉にそこに集中した。勿論、僕の視線も、樫井の視線も、だ。

「は、はい、す、すすすみませんッ！」

僕の謝罪の言葉は、曝け出されたネイティヴ教師の片肩の肌に向かって飛んで行く。

そこにあるのは 桜吹雪。遠山の金さんと同じ、桜吹雪の彫り物だ。

「オーケーオーケー、ミスタータキハラ」

言いながら、ネイティヴ教師が指で輪を作る。どうやら僕は許しを得たようだった。

次に、ネイティヴ教師の視線は樫井の方に移る。それに樫井も気付いたようだったが、謝罪の言葉を発する気配は無い。「M r . K a s h i i ? 」とネイティヴ教師が強い語調で聞いてきてから、やっと口を開いたかと思えば、

「でもでも、レミツシユ先生、窓の外を見てくださいよ」

と、何やら訳の分からない事を口走る。お前、いいからとりあえず謝つとけて。ほら、憤慨した表情で迫って来るじゃん。桜吹雪掲げたまま、凄く怖い顔でこっち来るじゃん。怖いから、マジで怖いから。

あまりの怖さに僕は思わず目を瞑っていると、突然。「H a h a

h a h a h a h a h a !」と、ネイティブ教師の笑い声が聞こえた。

目を開いてみると、大ウケしたネイティブ教師がしゃがみ込んで床をバシバシ叩いている光景が目に見え込んだ。はた迷惑なウケ方である。……って、そうじゃなくて。

教室がざわめく中、そこまで彼をウケさせたものは一体何なのか、という興味に全力で引つ張られ、僕も窓の外を見してみる。

「は？ 嘘？ ……えええええええーっ？」

なんとということでしょう。白馬が、グラウンドを走り回っているではないですか。

二限目の英語の授業が終わり、待ちに待った中休みが訪れた。

僕と樫井はすぐさま教室を飛び出し、白馬の待つグラウンドへと向かう。到着すると既に、大量の生徒が輪を作って白馬を囲んでいた。

「おーおー、大人気だなあこの白馬」

「そりゃあ、こんな事滅多に無いし。どっから来たんだろ」

「どっから来た、か……。よしよし待ってる、俺が訊いてきて進ぜよう」

そう言い残して、樫井は輪の中をぐいぐいと進んでいき、白馬と対面する。そういえば奴はさつき、『馬の言葉が理解できる』とか宣言していた。まさかあれは、本当だったのか。

僕は、馬を撫でたり撫でたり撫でたりする樫井の勇姿を、僅かな期待を乗せて眺める。しばらくして撫でる事に飽きたのか、樫井はようやく馬の口に耳を寄せ、一笑してから、高らかに通訳をした。

「『吾輩を撫でたいのならば並ぶがよい、人間どもよ』と仰っていますー！」

その言葉が輪を作る生徒に届くと同時に、「うおおおおおおっ

「！！」という歓声が上がる。そして、我先にと列を作り始めた。ひよひよいと軽い足取りで戻ってきた榎井が「どうだどうだ、凄いだろ？」と、得意げな顔で僕に語りかける。

「期待して損した。テキストな事を言ってるだけでしょ、あれ」

「……むむむむ、失礼だな全く。俺が言っていた事は誰にも否定出来ないだろ、この場の誰も、俺以外、馬の言葉は分からないんだ」

「言ったもん勝ちじゃないか」

「ふっふっふ、そんな負け惜しみのような言葉じゃ、全然全く微塵も俺の特殊能力“ヒアリング・ア・ホース”は否定できないぞ」

今すぐに殴りたくなるようなドヤ顔で、榎井は言う。

「というかコイツ、『この馬がどこから来たか』について訊いてないじゃないか。僕は気付いたが、何も言わない。どうせ榎井のことだ。マトモな返答は期待できない。」

「さてさて、そろそろ中休みが終わるが、戻るか滝原？」

「うーん、どうするか」

この珍しい状況を楽しみたいといえれば楽しみたいけど、このまま生徒に撫でられ続ける白馬を見ていてもしょうがないような気がした。

「てかさてかさ、何で教師は止めに来ないんだろっな？」

榎井がふと、素朴な疑問を口にした。確かに、この騒動のことを教師側も当然認知しているであろう訳だが、止めに来る教師の姿はどこにも確認できない。あ、いた。並んでる。校長とか、教頭とか、並んでる。真ん中くらいに並んでる。何やってんのこの大人たち。止めないの？ いやいや、「楽しみですなあ」じゃないから。わりかし緊急事態だから。

それから何人かが白馬を撫で回し、満足して校舎へと戻っていったところで、中休みの終了を告げるチャイムが鳴った。……が、誰も列を離れようとしてない。勿論、校長も教頭も、あ、うちのクラスの次の授業を担当してる数学教師も。いいのかそれで。あなた達はそれでいいんですか。お金、貰ってるんでしょう？ だから、「始

業のチャイム、なかなか聞こえませんかあ」「じゃないって。なに現実逃避してるの？

そんなこんなしている内に、校長の出番が回ってくる。「やっと来ましたな」と満面の笑みで校長が白馬に触れようと瞬間。「ヒヒン」というお馴染みの鳴き声を上げ、猛ダツシユで逃げ出す白馬。あっという間に校門を超え、どこかへ消え去ってしまう。あ、校長、残念そうな顔してる。教頭も数学教師も同じように落ち込んでいる。三人とも、今にも崩れ落ちそうな重い足取りで職員室に戻っている。……哀愁ただよう背中が、とても印象的だった。

「なあなあ滝原、どうする？」

「どうするって？」

「いやいや、追おうぜ？ あの馬を」

「追うって、次の授業はどうするんだよ」

「おいおい滝原、冷静に考えてみる。数学の、しかも、落ち込んだ教師が暗澹たる気分で行くと予想される授業と、謎の白馬を追いかけるのと、どっちが楽しいと思う？」

提示された二者択一。どう考えても、楽しいのは後者だ。選択した瞬間にはもう、校門へと僕は走り出していた。

校門を出て学校の周りを走り回ること数分。意外とすぐに、謎の白馬は発見された。

「いたいた！ こっちだ、滝原！」

樫井が指し示しているのは、公園。追いついて見てみれば、そこには校庭の時と同じように人だかりがきている。そして、人と人の隙間から、ぽっくりぽっくり歩く白馬がちらちら見えた。

「よしよし、では今度こそ、どこから来たのか訊いてきて進ぜよう」
そう言い残して、樫井は再び白馬のもとへと向かっていく。なんだよアイツ、その質問自体は覚えてたのかよ。

堂々とした足取りに、白馬を見ていただけのギャラリーが、スッ

とスペースを空ける。楽々と白馬と二回目の対面を果たした榎井が、
またもや馬を撫でまくる。それから、馬の口に耳を寄せ、一笑して
から、高らかに通訳をした。

「『王様を探しているのですが、どなたか御存知ありませんか？』
と仰っています！」

その言葉が、主に主婦と小さな子供で構成されているギャラリー
に届くと同時に、「王様……？」「ねえねえお母さん、もしかして
この子、白馬に乗った王様の白馬？」「どこの国の王子様かしら」
「奥様、見ました？」「いえ全く。そんなイケメンは見かけてない
わ〜」と、ざわつきが起り始める。あつという間に情報が歪んで
いく光景はもはや清々しいほどだった。

ざわつきの中、またまた軽い足取りで戻ってきた榎井の後ろには
白馬がついて来ていた。

「見る見る滝原！ 俺の翻訳の精度に感服した白馬がついて来たぞ
！」

「へえ、そりゃあすごいね」

僕はその主張をテキトーに流す。というかコイツ、また『この馬
がどこから来たか』について訊いてないじゃないか。相変わらずテ
キトーな仕事をしやがる。

「で、この後はどうする榎井？」

「何言ってるんだ滝原。決まってるんだろ？ 王様を探すんだよ」

「だからそれ、お前のテキトーな翻訳 　　がはっ！」

台詞の途中で、何故か僕は吹っ飛ばされた。砂場に思い切り尻餅
をつく。胸部に鈍い痛み。なんだなんだ？ 何で僕は、馬に頭突き
されたんだ？

「どうしたどうした、滝原の事が嫌いなのか？ え？ 『コイツは
敵だ』？ いやいや、コイツはなんだかんだでいい奴だぞ白馬君」
どうやらあの白馬に僕は敵認定されているようだった。なんで？

僕が何をした？ ああそうか、これが動物と人間の間に介在する
理不尽というやつか。

まあ嫌われているならしょうがない。諦めのついたところで、僕は制服についた砂をはたきながら、立ち上がる。

「で、樫井。いい加減、この馬がどこから来たか訊かない？」

「おっとっと、そうだったな。……なにになに？ ははくん、なるほどなるほど、マザー牧じよ　ぐええっ！」

今度は樫井が頭突きを喰らう。吹っ飛んだ先には僕のように砂場は無く、ああ、痛そうな着地だ。可哀想に。

「おうおう、恩を仇で返したな畜生めっ！　ちよっとしたギャグだろ！　これがヒューマニアンジョークなんだよっ！」

樫井の主張に、ぶるるる、と鼻を鳴らして後ろ足で二回地面を蹴り、蹄で音を出す。まだご立腹のようだ。というか、人間の冗談と言いたいならヒューマンジョークでいいだろう。無駄にリズムを意識しすぎだ。

「分かった分かった。ちゃんと伝える。『吾輩は王様を背中に乗せ、こことは違う世界からやって来た』だ、そうだ」

「へえ、ユーモア溢れる白馬だね」

「ところがどっこい、これが大真面目な話らしい」

「じゃあつまり、僕たちはその王様を探さなきゃいけないってこと？」

「うむうむ。そういう事になる」

無駄に仰々しく頷く樫井。……ああ、面倒くさい事になった。今すぐにでも帰りたい。制服姿で白馬を連れて異世界の王様を探さなくて、恥ずかしいにも程がある。

「とにかく、探しに行くぞ滝原」

「……しょうがないな」

僕は渋々了承する。早く王様を見つけて学校に戻ろう。その場のノリでこの馬を追い掛けた事を後悔しながら、僕は一步踏み出した。しかし、探す対象が“異世界からやって来た王様”といえども、見た目は人間であろう。それを探し出すのに、手がかりが全く無いのは少々キツイ。そういうわけで、僕は樫井に何か手がかりがある

かどうか白馬に訊いてもらうことにした。

「ほいほい、あー、なるほどなるほど。……」王様はパンが大好きです』とのことだ」

「じゃあ、向かうべきはパン屋だね」

「……だがだがしかし、時に滝原。お前はどこにパン屋があるか知っているか？」

「あー……、知らない」

この学校に電車通学で通い始めて一年が経過したが、僕も樫井も、駅から学校までの道と、学校から主要な娯楽施設までの道以外は、ほとんど通ったことが無かった。

しかし、僕には自信があった。パン屋へと辿り着けるといふ、絶対の自信が。

だから、僕は力強く答える。

「知らないけど、多分、こっちの方だ」

直感に従うままに歩くこと数分。意外とすぐに、向こうの方に『Mirreclear Bakery』という看板を掲げたパン屋が見えた。

「うひゃー、滝原、お前凄いな。見事にパン屋に辿り着いたぞ」

樫井には“ヒアリング・ア・ホース”とかいう訳の分からない特殊能力があるらしいが、そのレベルで競うのであれば、僕にだって特筆すべき能力はある。

「これも僕の特長能力のお陰だよ。感謝しな樫井」

「おいおい、なんだよそれは」

樫井が興味津々に尋ねてくる。僕は自信満々に答える。

「リアル土地“勘”って感じかな。なぜだか僕、知らない土地でも一度も迷ったことないんだ」

「うわうわ、俺の“ヒアリング・ア・ホース”より圧倒的に便利じゃないかよ。うらやま妬ましいな全く」

榎井からの羨望を受けて僕が優越感に浸っていると、急に後ろの白馬が「ヒヒーン！」とお馴染みの声で鳴く。

「どうしたどうした？ ……」『この近くにいる』？ なんだと！？ それは本当か！ よっしゃ滝原、パン屋に突入だ！」

走り出す榎井。自動ドアの前で一時停止した後、あるうことが白馬を連れたまま店内へと飛び込んだ。続けて、それを追い掛けた僕も入店。

すると目の前に、店員と揉める男の姿。そしてその服装は 王冠に、赤いマント。どう見ても、明らかに、これ以上の王様はいない程の、王様だった。

「いたいた！ 王様だ！」

榎井が声を上げる。次いで白馬が「ヒヒーン！」と嬉しそうな声で鳴く。驚きのあまりに、店員さんの表情はフリーズしている。

そして、レジに向いていた王様が、馬の雄叫びに反応して振り向いた。

「お、おお、おお、ヴェルデインではないか！ 会いたかったぞ！ ヴェルデイン！」

感動の再会だ。そう思ったのも束の間。思わぬ事態に、僕と榎井の表情は、パン屋の店員さんと同じようにフリーズした。

今、目の前で、いかにも王様な服装で白馬と抱き合う王様は、僕らがさつき授業を受けていたネイティヴ教師 レミッシュ先生とそっくりだったのだ。

その名をアルパミッシュという、僕らのネイティヴ教師にそっくりな王様が何故パン屋で揉めていたか。その理由は異世界モノにありがちなパターン パンを購入しようとしたものの、日本円を持っていなかったから、だそうだ。

僕たちはそのパンを王様に買ってあげ、店員さんに一言謝罪を入

れて、店の外に出た。そして、店の前にあるベンチで一息つきながら、冷静に状況を分析することにした。

なぜ王様アルパミツシュと白馬ヴェルディンがこの世界にやって来たのか。僕はそれについて王様に尋ねると、王様は食べていたパンを早々とたいらげ、語り始める。

「吾輩は一国の主、つまりは王様であった」

レミツシュ先生と同じ顔、同じ背丈、同じ声色で流暢な日本語を操る王様に、尋常でないほどの違和感を覚えながら、僕たちは王様の話を拝聴する。

「ところが或る日、我が城に隣国の王子が、兵士を引き連れて攻め込んできたのだ！ 吾輩は子供の頃からずっと一緒に遊んでいた馬ヴェルディンと共に、すぐに隠し部屋へと隠れたのだ……が、しかし！」

早速の衝撃展開に、僕は手に汗を握る。

「辿り着くにはとても複雑な道にあるはずの吾輩の隠し部屋は、いつも簡単に、敵に見つかってしまったのである！」

隣国の王子の凄さに、僕らは絶望を受ける。

「その瞬間、吾輩は咄嗟の判断で、切り札を切った。それが、このヴェルディン！ この馬は、異世界へと渡る力を持つと言い伝えられている、血統の馬なのだ！」

王様がベンチの隣に佇む白馬を指差す。僕らは「おおっ！」と馬に向かって拍手を贈る。

「そして吾輩は見事にこの世界へと辿り着いたわけなのであるが……」

先程までの語りのテンションが、急に下がった。僕らは、ごくりと息を呑む。

「どつにもやはり、居心地が悪い。……と言うより、“吾輩はここにはいけない”。そんな気が、堪らなくするのだ」

そう言って、王様は自分の肩を抱く。

「……故に、吾輩はこの世界から、早急に立ち去らなければならな

い。そして、この世界から再び元の世界に戻ると　これは文献に書いてあったことなのであるが　同じ時間の、同じ場所に戻るそうだ。……吾輩の切り札は結局、寿命をほんの少しだけ延ばす、ただそれだけの意味しか持っていなかったのだ」

続けて王様は、ふわっはっはっは、と乾いた笑い声を発する。それにつられて僕たちまで、虚しい気分させられた。

これは、どうしたものか。訪れた重暗い沈黙が僕たちの肩にズン、とのしかかる。

そんな嫌な雰囲気吹き飛ばしたのは、榎井の提案だった。

「なあなあ王様。最後に、どっか行きたいとことか、あるか？」

「行きたい所、か？」

「そうそう、行きたいところ。どこでもいいぞ？　この素晴らしい特殊能力を持った滝原が、王様をどこへでも連れてってくれる」

げ、榎井め、勝手に僕の名前を出したな？　……まあ、別に減るもんじゃないし、文句は言わないけど。

「……ならば一箇所だけ、行きたいところがあるのだが」

「おうおう、何処でもいいぞ？」

そう言つて、どん、と自分の胸を叩く榎井。待て待て、『任せとけ』みたいなジェスチャーをお前がするな。道案内するのは僕だぞ。

「桜が、観たい」

桜。その単語を聞いた瞬間、僕は無意識に眉をひそめてしまう。

「桜？　桜なら、そこにもあるじゃないですか」

僕はその街路樹を指差した。王様は小さく頷いて「まあ、そうなのだが」と言つてから、続ける。

「もっと沢山、咲いているところは無いか？　そう……森のように目を輝かせながら王様が言った願い。それを聞いて、僕は心の中で溜め息を吐く。……はあ。どうして、よりもよって桜なのか。どうして、僕が大嫌いな桜なのか。

「えーとえーと、確か、『ここから少し歩きますが、桜が沢山咲く、とても綺麗な場所があるんですよ』とかなんとか、古典の井上が言

つてた気がするぜ？」

と、「ご丁寧にわざわざ声真似まで織り交せて“桜の森”の存在を王様に教える榎井。それを聞いて、王様は目の色を変える。

「ならば、そこへ吾輩をどうか案内して貰いたい！　お願いだ！」

そしてすぐさま、深々と頭を下げ、懇願してきた。高貴な存在に頭を下げられるという不思議な感覚に、僕も榎井も、一瞬驚く。しかし榎井はすぐに気を取りなおし、僕の方に目配せをする。どうやら僕に判断を委ねるようだ。

……連れて行くべきか、行かざるべきか。勿論、連れて行ってあげたい。しかし向かう先には、僕が最も忌み嫌う桜が大量に待ち構えている。いやしかし、途中まで連れて行くのなら

僕があればこれ頭を悩ませている内に、王様は表情を陰らせる。そして、残念そうに「……やはり、駄目であるか」と呟いた。それが僕の心に引つかり、結局僕は「いや、勿論、……連れていきますよ」と、王様の願いを聞き入れるのだった。

そうだ。王様はこれから“死にに戻らなければならぬ”のだ。最後の思い出なのだから、桜の森だろうとなんだろうと、案内してあげるべきなのだ。王様の境遇に比べたら、『王様ファクションの人と白馬を連れて、制服姿で街中を練り歩き、忌み嫌う桜が大量にある場所へ向かう』なんて罰ゲームのような事も、全然大した事じゃないと、思えるじゃないか。

「お、恩に着るぞ、滝原という者よ！　……これは少ないが、感謝の印である。受け取るがよい」

もう一度深々と頭を下げ、王様が僕に渡してきたのは、『春季限定さくらパン』。本物の桜の花びらを使って作られたパンだった。

「いえ、遠慮しときます……」

というかそれ、僕らのお金で買ったパンじゃないか。

ひたすら勘に任せて、僕は進む。もうかれこれ数十分は歩いただろうか。しかしまだ、辿り着ける予感はない。

「そついやそついや、どうして桜なんだ王様？」

榎井は、隣でパツカラパツカラ歩く馬……の上に悠々と乗っている王様に向かって、質問する。いい質問だ。どうしてよりもよつて桜なのか、僕も知りたかったところだ。

「なにゆえ桜か？ ああ、それならば」

すると王様は歩いたまま、正確には、馬を歩かせたまま、榎井の質問への答えを示そうと、“トンデモナイ行動”に出る。

「え、え、ええええええっ！？」

「おいおい、マジか」

僕らが驚いたのは、王様が突然道端で片肩肌を曝け出したからではない。突然道端で片肩肌を曝け出した王様の肩にある、“桜吹雪の彫り物”に驚いたのだ。

「おお、すまない。驚かせてしまったようであるな。……これは、我が国の国章なのだ」

「こ、国章……！」

僕は再び驚いた。あのネイティヴ教師がしていた彫り物が、異世界では一国の国章になっていたなんて。

「でも、吾輩の世界では、桜はもうほとんど絶滅してしまっているのだ。唯一隣の国……つまりはあの王子の国に残っていた桜も、数年前に全て焼かれてしまったと聞く。ゆえに、死ぬ前に一度だけ、見てみたくな」

「そつかそつか。そいつあ、涙なしでは聞けない理由だ」

うんうん、と目を擦りながら頷く榎井。涙もろいヤツだ。

しかしこの王様、顔といい、体格といい、声といい、そして、肩の桜吹雪といい、レミッシュ先生にそっくり過ぎて、僕はふと思っってしまう。もしかや二人は同一人物で、これは僕達に対する悪戯なんじゃないか、と。

そんな事を先生がするメリットなど全く思いつかないけれども、

僕は何も考えずに、その疑問を脳から直通で口から滑り出させてしまふ。

「あの、王様。レミツシュ……という人を知っていますか？」

「レミツシュ？ 知らぬが、それは誰であるか？」

「そいつはそいつは、えつと、王様と同じ顔で同じ体格をしてる、俺達に英語を教える先生だ」

「それどころか、肩の彫り物まで全く同じなんです」

「ふむむ……それは多分、この世界で吾輩に対応する存在なのだろう」

王様の台詞に対し「なんだなんだ？ 対応？ おいおい王様、ちゃんと説明してくれよ」と榎井が詳細説明を求める。

「吾輩もよくは知らぬが、この世界と吾輩の世界の人物は、対応しているのではないかと思つたのだ」

「中身だけが違う、同じ人間が双方の世界に存在している……つまり、僕と同じ見た目の僕じゃない誰かや、榎井と同じ見た目の榎井じゃない誰かが向こうの世界にも存在している、って事ですか？」

榎井は「あーあーなるほどなるほどっ、分かりやすいな。流石は滝原だ」と、スッキリしたような表情で手をぽん、と叩いた。

さて、ここで気になってくるのは、異世界での僕は一体何者なのか、ということだ。そこで僕は興味に突き動かされるがままに、王様の知り合いに僕にそっくりな人がいないか訊いてみたけども、凝視の末の王様の答えは「……うむむ、……知らぬな」というものだった。うーん、ちよつと残念だ。

「じゃあじゃあ俺は俺は？」

そう言つて自分を指差す榎井だったが、王様の「知らぬな」という一言に「へえへえ、面白くねえな全く」と自分勝手にスネる。なんなんだお前は。失礼の塊じゃないか。

そんな榎井が「けっ」と言つて道端の小石を勢いよく蹴り飛ばした瞬間。王様が斜め右前方を指差し、目を輝かせて声をあげた。

「おおっ、……滝原に榎井よ、もしかして、あれではないか？ い

や、あれであるっ—」

それからすぐに白馬を走らせ、「桜だ！ 桜の森だ！ 桜だ！」と叫びながら、王様は一直線に桜の咲き乱れる場所へと向かっていく。

榎井がそれを追ってダツシユ。続いて僕もダツシユ。しかし、桜の花びらがひらひらと自分の方まで飛んできているのに気付いて、僕はすぐに立ち止まる。続けて榎井も立ち止まる。

「……んじゃ、僕はここら辺で待つてることにするかな」

「おいおい、いいのかよ？ 満開とは言えないが、なかなか綺麗に咲いてるぜ？」

「んー、これ以上はちょっと、無理かもしれない」

この時点で既に、気分が悪くなってきている。経験上、ここから先に進めば、大変な事になりそうだった。

「いやいやまったく、可哀想にな。桜アレルギーだなんて」

そう。僕は桜アレルギーで、だから、春も、桜も、大嫌いだった。「大丈夫だよ。僕には桜の良さが、最初から分かってないんだから」僕は笑って、そう答える。榎井は「そっかそっか、それもそっか。んじゃ、また後で戻ってくるわ」と言っつて、王様の方へと走って行った。

その先には、ひらひらと舞う桜の花びらの中で、林立する桜の木の辺りを飛びまわる王様が見えた。その動きに合わせて、飛び跳ねる白馬が見えた。

これから死にに帰らなければならぬ人の表情とは思えないほど、明るく、希望に満ちた表情で、王様ははしゃいでいた。

「ほんと、良かったよ」

王様に、最後の思い出ができて、本当に良かった。

「二人とも、本当に感謝するぞ」

白馬に乗った王様が、僕達二人に向かって頭を下げた。それでもまだまだ王様の頭は僕達の頭より高いところにある。が、別にそれはどうでもよかった。

「本当に、帰るんですか？」

「……やはり、長居する訳にはいかぬな。身体が違和感を覚え始めているのだ」

「そうかそうか、いよいよ王様ともお別れか、悲しいなあ、うんうん」

涙ぐむ榎井が、王様と握手する。王様はまた「本当に、感謝する」と言っている。

「それでは、お元気で」

続いて僕が握手を求める。お元気もなにも、王様が元気でいられるのはあとほんの数分だろうと気付いたのは、口に出した後だった。しかし、別段気にする様子もなく、王様はにこやかに僕の手を握る。そして、急に真面目な顔になったかと思いきや、僕に向かって、驚くべき事実を告げてきた。

「吾輩は、嘘をついていた。……吾輩の世界での滝原は、我が国に攻めてきた王子なのだ」

「はっ？」

僕は思わず本日二度目の素っ頓狂な声を出してしまう。僕が、王子？

「おうおう、異世界のお前、王子様なのかよ。その持ち合わせた凄まじい勘に重ねて、全く羨ま妬ましい限りだ」

榎井はそう言っつて、僕の肩をバシバシと叩いてくる。痛い。……が、それが気にならないくらい、僕は驚きのあまりに呆然としていた。

「だから滝原よ、一緒に、来てくれぬか？ 王子と見た目が同じお前ならなんとかなる、そんな気がするのだ」

そんな僕に、王様からの更なる追撃。僕はもう、混乱するしかない。見かねた榎井が、王様に突っかかる。

「おうおうちよつと待てや王様。それは流石に、問題だろ？ なん
とかならなかつたら、どうするつもりだ」

「しかし、吾輩が死んでしまったら、今まで平和だった国はどうなるのだ？ 国民はどうなるのだ？」

「ダメだダメだ、それは今、関係ねえ！」

「だがしかし」

反論を紡ごうとする王様を「ヒーン」と、白馬が宥める。

「そう、であるな。分かっている、分かっている。無関係の善人を巻き込むなんて、あるまじき事であるな」

一瞬だけ淋しげな顔をしてから、王様は「……行くぞ、ヴェルデイン」と掠れた声で、白馬に指示を出す。

そこでようやく、事態が呑み込めた僕は、去りゆく王様の背中に向かって、叫び声をぶつける。

「王様、僕は確かに、一緒に行くことは出来ない、でも、一緒に考えませんか！？」

ぴたりと、白馬の足が止まる。

「運命に、抗いましょうよ！」

王様が、振り返る。

「隣の国の王子を 敵を倒す手段を、考えるんです！」

ここで何もせずに行かせれば死んでしまう人を、引き止めないことなど、僕には出来ない。

「おいおい滝原、そんな方法、あるのか？ 敵は隣国の王子だけじゃなくて、王子が引き連れた兵士もいるんだぞ？ 逃げ道も無い。」

「詰み」だぞ？

心配そうに樫井は訊いてくる。しかし、僕は一つの確信を持っていた。

隣国の王子が、王様の隠し部屋の場所へとすぐに辿りつけたのは、何故か？

それは王子が僕と同じ姿を持っているように、僕と同じ“初めて通る道でも、目的地に辿りつける”特殊能力を持っているからでは

ないか？

それならば、僕と同じく、王子は“あの特徴”を持っているはず。だから、僕は自信満々に答える。

「大丈夫だよ。僕には秘策がある。……なんせ僕は、桜アレルギーだからね」

大嫌いだっただけなのに、初めて役に立ちそうだ。

さあ、僕に何ら関係のない異世界にある、僕に何ら関係の無い一國を、救おうじゃないか。

「するとアルパミ王の右手には、いつの間にか白い袋が握られていました。」

不思議に思った隣国の王子様でしたが、構わずにアルパミ王に剣を向けて、突進します。

しかしアルパミ王はそれに動じず、その代わりに、白い袋の中身を隣国の王子にふりかけました。

すると、なんとということでしょう、隣国の王子様は突然、ばたりと床に倒れて、苦しみだしたではありませんか。

王子様の連れていた兵士たちはざわめき、アルパミ王に言いました。貴様、何をしました！

アルパミ王はそれに答えます。吾輩が今持っているのは、毒薬である。死にたくなければ、早々に立ち去るがよい。

それを聞いた敵の兵士たちは、部屋の中に舞い散るピンク色の花びらのようなものに恐れを抱き、王子様を担いですぐに逃げていきました。

こうして、アルパミ王の国の平和は、守られたのでした『「めでたし、めでたし』」

その言葉を最後に、物語はハッピーエンドとして結ばれた。

「つまり、てきをしなければひやくせんあやうからず、ってことだね」
興奮覚めやらぬ様子で、子は母にそう告げる。それで満足したのか、無邪気な子供はすぐに眠りに就き、夢の世界へと旅を始めた。
布団の横で取り残された母だけが、息子の発言に首を傾げ、でもすぐにその違和感を忘れて、愛しい子供の布団をかけ直し、頭を撫で、起こさないように、小声で言った。

「おやすみなさい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4686p/>

白馬から始まる人助け

2011年1月30日18時55分発行